

遠距離介護から見える「介護」の現場

パオッコ活動現場より⑩

NPO法人パオッコ「離れて暮らす親のケアを考える会」 太田差恵子

12月は「人権週間」があったので、介護を通して考えなければいけない「人権」について講演をさせていただく機会が数回ありました。

人権とは、文字通り人間が、人間として当然持っているといわれる権利……。このことにつき介護の現場で、考えさせられることがしばしばあります。

振り返れば、もともと私が介護の取材に入り込むきっかけとなったのも、そういうことだったような気がします。

もう20年近く前のことです。フリーライターをしていた私のところに、「お年寄りが安全に暮らすためには」というテーマの冊子を書く仕事が入ってきました。

は別居のお子さんがいらっしゃるようですが、自らの意思でひとり暮らしを継続されているのです。

この2事例では、前者の女性は自身で自身のニーズを満たせない弱い立場。後者の男性は自身のニーズを達成されている。あれから20年近くがたちました。現在も、前者のような立場の高齢者は大勢いらっしゃるのでは……。女性の希望は、贅沢なものでしょうか。いいえ、私は「人権」ともいえるかなえられるべきことだと思うのです。

取材に1年くらいの時間を要し、その間、お年寄りを見た

ら話しかけ、お宅にもお邪魔しインタビューを積ませていただきました。忘れられない光景がいくつかあります。

障害があり高齢者でもある独居の女性宅を訪れたときのことです（2階を他人に貸しておられました）。

女性は、そのつい先日、ベッドから落ち落下したままの体勢で数時間を過ごしたそうです。2階の間借り人が帰ってきて、ようやく助けてもらえたのだとか。当時は、まだ「措置」の時代でした。しかし、緊急通報システムはありました。私は取材者という立場であり、差し出が

ましいことは重々承知でしたが、

自治体からこのサービスの提供を受けたらいかがですか、と進言しました。サービスの内容を説明すると、女性は目をきらきら輝かせ「そんなサービスがあるのですか!」と言いました。

ところが、その場に同席していた自治体担当者が即座に、「お宅は対象外です」と遮ったのです。私は驚きました。対象外の理由は、疎遠ではあるけれど近所に息子さん住んでいるため、ということでした。

しかし、息子さんは女性宅を訪れないし、現にベッドから落ち、数時間もそのままの体勢だったとおっしゃっているのです。けれども、自治体担当者のその

言葉に女性は「そうですか」と言うだけで、言い返すことはなく、一瞬にしてその話題は、その場から消えました。

からだの不自由なお年寄りと、サービスの「情報」にも出会えず、やっとな出会えても「言われるがまま」なんだと、その弱い立場を知りました。

別の90代の男性の姿も鮮明に覚えています。

当時は、介護保険が始まる6〜7年前で、年輩いた高齢者は、子と同居することが当たり前と言われる時代でした。ところがその男性は高齢にもかかわらずひとり暮らし。しかも、1階は店舗で2階が自宅でした。とても急な勾配の階段で、当時は若かった私でさえ足元が気になったほどです。

2階のお住まいに入ると、陽が差し込みとても明るく気持ちのよい空間でした。男性は言いました。「この階段を毎日のほりおりにしているから足腰も健康。それに、こんなに明るい部屋で快適に過ごせるんです」。男性に

一方で「介護者」の立場も考えなければなりません。前述2事例では主たる介護者家族は存在しませんが、一般的には、それを担うのは「家族」です。ケアする家族の人権も考えなければなりません。

ご自宅で認知症の義父の介護をされていた女性にインタビューさせていたことがあります。

認知症によりさまざまな症状が出ており、女性は体力的にも精神的にも疲れ果てておられました。ある日、朝起きて鏡を見ると、ご自身の片目のまぶたが垂れ下がっており、驚き病院に駆け込んだといいます。「うつ病」寸前と診断されたそうです。

要介護者の立場と介護者の立場。「うつ病」寸前との診断を受け、女性にはためらいがあったようですが、夫やそのきょうだいやからの勧めで義父は施設入居されたそうです。住み慣れた家で住まい続けたいと願っても、その心身状態によっては、支えることが困難になります。

こんな女性にも会いました。

親とは別居で、車で1時間くらいの距離。両親は2人暮らしですが、どちらも身のまわりのことは何とかできるものの、買い物や通院には付き添いが必要です。両親共、いくつもの持病を抱えているので、通院も頻繁です。その度、女性は車で片道1

時間を通うため、パートも辞めざるをえませんでした。通院以外にも、なんやかやと「呼び出し」電話が掛かってくるそうです。

「両親は、私が隣に暮らしていると勘違いしているみたい」とため息まじりにつぶやかれました。ほとんど毎日、往復2時間かけて通うことになり、女性の体力も限界に達し、たびたび体調を崩します。自宅にいる時間には家事や高校生の子どもの世話をしなければなりません。

それでも、女性は「自分しかないから」と両親には体調不良を隠して元気に振るまい、通い続けました。話を聞いたのが5年くらい前。この間、両親共、繰り返し入院。現在も連日往

復されているようです。

こういう話を聞くと、もちろん親は大切で、それをサポートする子は立派だと思いつつ、破たんしないのだろうかと思いつつ、人間、それほど万能ではなく、できることとできないことがあると思うのです。

要介護者のニーズをかなえようと思ったとき、介護者はどこまでサポートするべきか。しなければいけないのか。

先に紹介した90代で急勾配の階段を上り下りできる元気があれば、子もサポートできます。しかし、そうでなくなってきたときにどうしたらいいのか。直接的な介護も大切ですが、親に代わって情報を集めたり、契約したり、「言われるがまま」を阻止したりする役割を担うことも重要です。限界を超え「介護うつ」などにならないよう社会資源を上手に活用していく。

私にとって、これまで取材させていただいた大勢の高齢者、その家族のお顔を思い出す「人権週間」でした。

NPO法人パオッコ

～離れて暮らす親のケアを考える会～

親世代はできることなら生涯、住み慣れた家で住まい続けたいと望み、子世代も仕事や子どもの教育などを考えると、故郷に戻ることは容易ではありません。そんな状況のなか、親の心身に衰えが生じると子世代はどうしたものか悩みます。パオッコは「ひとりの経験はきっとみんなの役に立つ」という理念のもと、情報や体験を共有。ぜひ、ホームページに遊びに来てください!

〒113-0033 東京都文京区本郷 3-37-8
本郷春木町ビル9F インキュベーションハウス内
ホームページ <http://paokko.org>